

真っ青な海、真っ白な砂、そして椰子の並木、白砂青松と言う言葉がありますが、松ではなく椰子の並木が並ぶ南洋の島パラオ諸島、それが私の生まれた所です。もう少しくわしく言いますとパラオ諸島アラカベサン島、ガラパン町にあった南洋庁のコンクリート官舎で生まれました。それは父が東京電機大を出てすぐ、母と結婚し友人と連れだって南洋庁の役人としてパラオにあった南洋庁に大正12年に赴任したからです。私は昭和12年1月の生まれですが、4歳までその官舎で暮らしました。大きなマンゴーの木が官舎の土地を取り囲むように数本あり、何か悪いことをしたのでしょうか、そのマンゴーの木に縛られた日のあった事を鮮明に覚えています。

昭和16年父がサイパン郵便局電話課長としてサイパン島に転任することとなり、一家は当然サイパン島に移動し、サイパン島の官舎に入りました。今思えばその年の12月、太平洋戦争が勃発したのです。その年も押しつまった12月8日突然ラジオから日本軍は太平洋上において戦闘状態に入れり、と放送が流れて来て、母親はなぜか「ヤッター、」と言って手をたたいていたのを覚えています。その時は、日本は戦争に勝つものと信じていたのだと思います。しかし翌昭和17年の6月にはミッドウェー海戦で日本は大敗北し、翌18年2月にはソロモン諸島からの撤退が始まり、それからは敗退の一途をたどることとなり、昭和18年の後半には、サイパン、テニアン両島に空襲が始まりました。私は18年、サイパン国民学校に入学したばかりの一年生、サイパン島では島民と日本人が同じ様に入学し机を並べました。穏やかだった日々はほんの数カ月だったのではないかと思います。近くの海岸に連れて行ってもらい魚の泳いでいるのが見える遠浅の海で手を伸ばして体を浮かせる浮身の仕方を父から教えてもらった事、またある時は島の端にあったチャランカの池たしかそんな名の大きな池に魚釣りに連れていってもらった事が父親との繋がりの僅かな思い出です。先に書きましたように昭和18年の後半には空襲が始まり、登校してもすぐ帰宅、父から電話が入り今テニアンが空襲を受けているから、すぐタッポーチョウ山の洞穴へ逃げなさい、と母が指示を受けると、母は私達の手を引いて急いで洞穴に向かうのが日常茶飯事となりました。だから私は一年生の後半に学校で授業を受けた記憶がほとんどないのです。昭和19年に入ると空襲の数が益々頻繁となり、洞穴から家に帰ってくると、台所の柱に空襲を受けた時の弾丸が突き刺さっていた事もありました。その19年3月に女子供に強制引揚げの命が下り、父を残して私達が引き揚げることとなりました。

計画では大型客船のアメリカ丸と小型の半軍艦サントス丸の2艘がこれにあたり、アメリカ丸が先に出港すると言う計画だったらしく、母は、南洋庁の家族はほとんどアメリカ丸に乗船だからとはじめその手続きを取ったらしいのですが、どうしても荷造りが間に合わないと知り、後発のサントス丸に乗船するべく手続きを変更したのだそうです。そうした所、急に2艘が同時に出港することとなってしまい、荷物はほとんど置いて父が後で送ることとし、サントス丸に乗って出港したのだと語っていました。2艘は毎日ほとんど並行して航行し、サントス丸は客船ではないので甲板下のスペースに救命胴衣をつけたまま寝起きしていました。他の人々はほとんどが船酔いに苦しんでいましたが不思議に私の家族（母と姉妹と弟、それに私の5人）は船酔いに苦しむことなく航海を続けていました。ところが、出港して4日目の早朝、ドカーンと言う猛烈な爆発音に飛び起き、母に手を引かれて甲板に登った時には、毎日すぐ隣りを航行していたアメリカ丸の姿は影も形もなくなっていました。すぐに私達の乗ったサントス丸の横をかすめて魚雷が走ったそうです。今想えば、アメリカ丸からサントス丸に乗り換えた運、魚雷が後から発射された運、この2つの幸運によって今私はここに生きているのです。

その年昭和19年7月サイパン島玉砕、当然父は帰らぬ人となりました。しかし後日談があるのです。終戦後、しばらくたった或る日一人の青年が我が家を訪ねて来られました。千葉に住む小林と言う方でした。その方はサイパン郵便局の職員として父の部下だった方で、激しい戦いの中、47歳の父を庇いながらバンザイクリフの近くの海岸までたどりついたのだそうです。昼間は物陰に隠れ、夜になると小林青年が水と食糧の調達に走り廻り、二人で玉砕の少し前まで逃げ延びて、これ以上は逃げる場所がないと言う崖下までたどり着いたのだそうです。そこで父が小林青年に向って、「君はまだ若いので体力もあるから、ここからテニアンに向って泳ぎなさい。」と命じたそうです。サイパン島からはテニアン島が、丁度、静岡から伊豆半島が見えるように見えているのです。しかし艦砲射撃を繰り返す軍艦が取りまいていたとの事です。それでも父は、衣服は頭にしばりつけて沖に向って泳いでいくように指示をしたそうです。父は「自分は手榴弾を持っているから、この場で自決するから、君だけでも助かってほしい。」と懇願したそうです。命ぜられるままに小林青年は海に入り泳いでいる所をアメリカの軍艦に拾い上げられ、終戦後、日本に帰されたと言って我が家を訪ねてくれました。その結果父の行動のほとんどを知るところとなり、母はサイパン島を訪れ、当時我が家で女中さんとして働いていた現地人

のカヨ子さん（この方は戦後グアム島で看護婦さんをしていることがわかっており、母とは文通をしていた方でした。）の案内を得て、霊をなぐさめる旅を実現出来ました。私は後になって考えるのですが、小林青年に泳ぐよう命じた時、父は、小林青年が敵艦に見つかり捕虜となれば助かることを見抜いていたのではないかと思いました。ではなぜ一緒に泳がなかったのかと思った時、当時の「戦陣訓」に「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪科の汚名を残すこと勿れ」としっかり指導されていたのだと思います。ともあれ、戦争によって、天国と地獄を見ることとなりました。

苦しみ抜いた戦後の生活、ことに自分の歩んだ数々の経過については後日談にゆずることといたします。

戦後76年を経過し、戦争を知らない日本人が80%以上となる時、改めてユネスコ憲章の前文にある「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心に平和の砦を築かなければならない」という言葉を自分の心に語りかけ続けなければならぬと思っています。